秋

よしこ

秋九月大空高し空青しみつめてあれば心ときめく
やまひ故と退園屆持ちて來し若き母の瞳寂しかりけり
すべり臺すべり行く子に蝶一つたはむれ遊ぶ十月の朝
まゝ事に水引草をとりつくし叱られしかなわが六つのころ
福子といふ名さへふさはしつぶらなる瞳そのまゝえみてゐるかな
七色の絹糸かゞりの毬のごとはづみゆくなり六つになる子は
或る時は王者の如くよそほへど迎ひおそしとひたすらに泣く
かたつむり見つけいでしと遠くより我名をよびぬ喜びのこゑ
ゆふ暗のしのびより來て寂まりぬ遊びほうけし子も歸り來ぬ
ひいやりと秋朝風の快しかごめする子らみつめ居たれば
そのまゝに聖者おはすとみえたりし塔もかはりぬわびしかりけり（ニコライ堂）